

博報堂教育財団 第14回「日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名（フリガナ）	YEOH Lee Su（ヨーリースー）
在住国名	マレーシア
所属・役職	マレーシア科学大学・日本語専任講師
招聘回（招聘研究期間）	第14回（2019年9月1日～2020年2月29日）
受入機関	国際交流基金日本語国際センター
招聘研究テーマ	マレーシアの高等教育機関における日本語学習者向けのビジネス日本語教材作成
研究目的	ビジネス日本語教科書を作成する
研究成果概要	

1. どのように研究を進めたか（具体的に）

(1)教科書の内容と構成の検討（2019年9月3日～30日）

- 受け入れ機関の担当の先生と相談して、教科書に取り入れるべき内容と構成を検討した。
- 受け入れ機関の図書館所蔵の「ビジネス日本語」の教科書を参考に、教授項目を検討した。
- 教科書を全8課で作成することを決め、10月から2月までの作業手順を作成した。

(2)事前調査の量的データの分析と論文執筆（2019年9月7日～10月19日）

来日前に、現地の日系企業で働いているマレーシア人社員と日本人駐在員にアンケートとインタビュー調査を行った。その量的データの分析結果を論文にまとめた。この論文の口頭発表および学術雑誌への投稿については、後述の「3. 研究成果」を参照のこと。

(3)事前調査の質的データの分析と論文執筆（2019年10月20日～11月15日）

上記の調査の質的データを分析し、その結果を論文にまとめた。論文は、現在、学術雑誌への投稿準備中。

(4)ビジネス日本語の教科書についての資料収集（2019年10月2日）

スリーエーネットワーク、凡人社、そうがく社を訪問して、市販されているビジネス日本語の教科書を分析した。最近の傾向として、外国人介護士や日本企業に就職を希望する外国人留学生のために作られたビジネス日本語教科書が多いことがわかった。

(5)ビジネス日本語講座についての資料収集（2019年10月2日）

公益財団法人アジア文化会館(ABK)で、外国人留学生を対象に開講されている「就職ための日本語コース」について情報を収集した。

(6)在日マレーシア人会社員に対するインタビュー調査（2019年9月3日～10月14日）

日本で働いているマレーシア人に異文化間コミュニケーションの問題への対応と、日本人の仕事の仕方やビジネスマナー、時間感覚、チームワークなどについてたずねた。

(7)作成した教科書の内容についての面談（2019年12月11日）

麗澤大学外国語学部教授の近藤彩先生から、事前の調査結果が教科書の内容と構成にうまく活かされていて、マレーシアの大学で日系企業への就職を目指して日本語を学ぶ学習者のために役立つ教科書になっているとのコメントをいただいた。

(8)科書作成作業(2019年10月～2020年1月)

全8課の教科書作成作業。「読解文」と「ビジネス日本語会話」の録音作業とイラスト作画。

2. 研究によりどのような知見が得られたか（具体的に）

今回のプロジェクトのために事前に行った「マレーシアの日系企業での日本語使用実態調査」のデータを分析した結果、以下の3点が明らかになった。

一点目は、日本人が常識と考えているビジネス文化がマレーシア人社員の常識ではないということであった。具体的には、5分前に集合場所へ行くことや、出勤時間は会社に着く時間ではなく仕事が始まる時間だと考えていること（「時間感覚」）、「ハウ・レン・ソウ」や「チームワーク」などのような仕事の仕方、はっきりとした指示や命令がなくても、その場の空気を読み気遣いを働かせることなどであった。これらの点は、日本人とマレーシア人が協働で仕事を進める上で、ビジネス・コミュニケーションの食い違いの原因になっ

ていることがわかった。

二点目は、「一般の社員」と「役職付きの社員」では、求められる日本語能力が違っていることであった。この点を考慮して、今回のプロジェクトでは、一般の社員に必要な「仕事の中で初めて会った人に挨拶をする」能力と役職付きの社員が必要になる「ビジネス場面の電話応対」や「ビジネス・メール」「社外の人との敬語を使ったやり取り」などのスキルを育成するために、読解とビジネス会話の内容を工夫した。読解とビジネス会話は、日本の本社とマレーシアの現地支社で働いているマレーシア人の実際の仕事内容をベースにして、具体的な仕事の場面を設定して、その場面でやり取りされる日本語を学び、最終的には学習者たちが自分で日本語を使って実際の場面でまとまった話や会話ができる能力を身につけることができるように工夫した。

三点目は、マレーシアでは新しく採用される現地社員のための新人研修はほとんどないため、学習者が就職する前に、日系企業のビジネス文化やビジネスマナーの理解とビジネス会話能力をある程度身につけておかなければならないことであった。今回のプロジェクトで、市販されているビジネス日本語の教科書の分析も行ったが、その結果、初中級から中級レベルの海外学習に適切な教科書はあまりないことがわかった。

日本企業が積極的に海外に進出している今、マレーシアだけではなく、様々な国や地域の実情に合わせたビジネス日本語の教科書や教材の作成がますます必要になっていると思われる。今回のプロジェクトで作成した教科書がその一つのサンプルなることを願っている。

3. 研究成果（予定を含む）

○論文（題目、掲載誌、発行者、掲載月、内容の概略（200字以内））

(1)論文の投稿（掲載決定）

雑誌名：Journal of Intercultural Communication Research

論文のタイトル：Intercultural Workplace Japanese Language Communication Challenges among Malaysian Japanese Speaking Employees in Japanese Companies

(2)論文の投稿予定

論文のタイトル：The Requirements of Japanese Language Proficiency and Business Competence among Japanese -Related Companies in Malaysia

○口頭発表（題目、イベントの名称、日・場所、内容の概略（200字以内））

研究大会での口頭発表（2020年3月20日～22日、オーストラリアのメルボルン）

・学会名：6th International Conference on Arts, Education and Social Sciences

・発表のタイトル：A Study of Communication between Malaysia Japanese Employees and Japanese Expatriates Employers

○その他の活動

①「第22回海外日本語教育研究会、日本語国際センターのこれまで・今・これから - 日本語教育で人と社会をつなぐ -」参加した。

②国際交流基金国際日本語センターの「海外におけるビジネス日本語教育のための教師研修」の発表会に参加した。

③アジア文化会館が主催した勉強会「日本企業で働く外国人に何を教えるか」での発表。発表テーマは「マレーシアの日系企業における現地人の日本語話者と駐在員とのコミュニケーション実態調査」

4. 今後の活動予定

・ 研究大会での口頭発表、および論文投稿については、「3. 研究成果」を参照のこと。

・ 新教材の使用（2020年9月の新学年から）

・ 新教材の出版（2021年9月予定）

・ 新教材のワークショップ

国際交流基金クアラルンプール日本語文化センターが主催する「マレーシア日本語教育セミナー」でワークショップを行う。（2020年10月あるいは2021年3月）

3つの日本語協会（ペナン・ペラック・クアラルンプール）（2020年4月から）

以上